

彼女と彼

shushu

彼氏に別れ話を切りだされた。

彼から「大事な話があるから」、って部屋に呼び出されて、彼はへんに緊張した様子で正座して、「もうつらくなくてしまったから、別れてほしい」、という趣旨のことを言った。

わたしには、断る理由もなかった。

\*

彼女、元彼女が自殺した。

しばらく彼女と連絡が取れなくなっている、知り合いである僕に確認をとってきてほしい、という旨の通達が社から入っていた。

複雑な気持ちもあったが、仕事上そうするのが一番丸いということも分かっていた。

だが、なにより、なんだが心臓がギュツとして、自然と呼吸が浅くなつてどうしても今すぐ確かめたいような衝動を覚えたのが記憶にある。

これが虫の知らせというやつなのか、それとも、僕の中に何か思うところがあつて邪推をしたのか、結局のところ、自分には分からない。

彼女のアパートには鍵がかかっていた。

リュックのポケットに手をつ突っ込んで鍵が開くはずはなく、インターフォンを押しても音沙汰がなかった。

僕の試した行動のすべてが推測の幅をみるみる減らしていつ、ひとつひとつの動きは覚束なく、それでも速さだけが上がっていった。

走馬灯のように記憶を漁り、たしか彼女が以前、近所に住んでいると言っていた大家宅が思い当たった。

僕がわざわざ訪ねてきたことに一瞬不思議そうにしつつも、事情を説明したら納得してくれた。

大家さんもここ最近では見かけていなかったらしく、合鍵を使つていったん様子を見てみることにした。

背の低い大家さんが扉を開けると同時に隙間から中を覗き込む。

真っ黒に飛沫のついた壁を視界が捉えると同時に視界が真っ暗になった。

\*

彼にはもともと仕事で興味があつた。

彼の目のつけ所には彼の人柄がよく表れていて、書きあがつてきたものには温かみがあつて、なにか惹きつけられるというか、たぶん彼にはセンスがあるんだと思う。

特集もいくつかまかせられるようになってきて、しまいは彼がいいかんじの記事を書けそうなネタ、という目でものを見ることすらあつた。

とはいっても、きっかけは彼からだつた。

わたしは今でも仕事の飲み会があまり好きじゃない。なんとというか、どうしても、言葉を返すことはでき

も、挨拶を返すことがうまくできない気がする。

そのせいでプレミを重ねて、それで帰り道から眠りに落ちるまで、決まってひとりで反省会をするのだ。

あとから見返せば簡単にわかることが、その場でもぱつとわかるようになる日は正直言つて見えない。

だから仕事で付き合いをもつのはけっこう上手い方じゃないかと自負してはいるけれど、ちよつと人より疲れやすいのが自分でもわかる。

そんなところが透けて見えてしまったのかもしれない。そういうところが彼のいいところなのかも、とも思う。

そうやって他人のことをよく見ていて、それでいてちゃんと気遣いのできるひとを目の前にすると、どうしても情けなさがまさつてしまう自分にも、なんだか嫌気がさす。

\*

それから警察に連絡したり、形式的な聴取があつたり、した、らしい。

自分の部屋の鍵を開けて、ベッドに腰掛けて、それでももう自分に来ることが何もないんだということを感じるまで、自分の腹が空いていることと、部屋の妙に薄暗いことに気が付かなかった。

後々警察の方が説明してくれたことで、彼女の部屋は密室で、荒らされた跡もなく、事件性はないだろうというところだけは、取り敢えず理解できた。

\*

彼とはかなり話が合った。というか、彼がかなり聞き上手なんだって気づいたのは付き合い始めてちよつとし

て、友人のカナエと話していたときだから、このときはあまり意識しなかったかもしれない。

自分からわかったのか、カナエがそれとなく伝えてくれたのかはあんまり覚えていない。

単に聞いてくれるとゆうよりは、彼もわたしの話には興味をもってくれていたように思う。彼に教えてもらったこともたくさんある。

そうやっていっているうちに、彼はわたしをよく買い物とか、あと美術館とか、わたしの好きそうなところによくさそってくれた。ちよつと話のはしに出したのを、覚えてくれていたんだろうか。

こうして思い返してみても、そういう彼との時間はもちろん楽しいものだった。それは確かだった。

でも同時に、そうやっていつも彼に気をつかわせてばかりで、なにか、わたしの中にある足りなさがある気がして、なんだか申し訳がたない気持ちになってしま

う。

そういうふうと言うと、彼は一瞬おかしなものでも見るように固まって、それから少し眉をよせて笑いながら、なにも、なにかしてほしくてやってくるわけじゃないんですから、と決まって言う。

\*

「見ない方ですね。見学ですか？」

振り返った目線の少し下には、カラフルで個性的なメガネに、ボブカットの女性。

「カナエさん」と直接話すことができたのは、偶然と言えば偶然ではあるが、今になって思えば、あんな状態

でいたら、遅かれ早かれどこかで接点ができていたようにも感じる。

「あ…すみません…えっと…」

突然後ろから声を掛けられたので焦る。

「とりあえず、中入ったらどうですか？」

指さした先の、黄緑の扉、目の端に移った水彩画教室の宣伝ポスターには、「参加体験毎回やっています。お気軽にどうぞ。」と書かれていた。

ここの水彩画教室の講師だという女性、カナエさんは薄茶色の木調の、なんだかかなりなつかしい感じの、絵の具の？独特の香りのする教室に僕を案内しながら、ごく簡単に、ふと話しかけてきた。

「結構そういう方、いらっしやるんですよ？」

「え？」

「なんとというか、ちよつと入りにくそうなって感じて入口にいる方。まあ、はじめて来た人なら当然かもしれないですけど。」

「そ、そうなんですか？」

我ながら、今更ながら、入口の周辺で不審者じみた行動をしてしまったことが、しかもそれで気を遣わせてしまったことが恥ずかしくなってきた。

そうしたらそれが誤解を与えてしまったようで、

「…あれ、水彩画教室に体験で来た方であってます？」

と言われて、見切り発車でここまで来てしまった自分の状況に冷静になってきた。

「は、あ…はい。…あ、でも道具とか全く…」

「ああ大丈夫ですよ。ここにあるの貸しますから。」

あーまだ時間まで結構あるんで、そのへんで座ってくつろいでください。ウチはできとくに準備してませんで。」

そういつてカナエさんは黒板の端に開いた、準備室らしき扉に入っていく。

「…どうも…」

と、に間隔を取って置かれた小さめの机とイスたちの内、その扉の近くにある、隅っこの席に腰掛ける。

「絵か何かのご経験は？」

カナエさんが開いた準備室の向こうから話しかけてくる。

「え…あ、えと…中学の時の美術で…」

寒色に汚れたパレットたちが奥に積まれている。

「ふふ、正直な方ですね。」

「…すみません…」

「あーいえ、いいんですよ。普通にそういう方のほうが多いんです。」

「そうなんですか？」

「ええ。なにか趣味を始めようと思って、心あたったのが学校の図工が楽しかったな、とか。」

筆やカラフルな絵の具、パレットがきちんと種類ごとにいくつも突っ込まれた箱を机の上に置きながら、カナエさんは続ける。

「…んしょ。逆に稀有なやつだと、昔、私の大ファンだつていうのが一人いましたけど、始める方は大体そんなもんですよ。」

「…理由、お聞きしても？」

まさかそこまで訊いてくるとは。

「…え、えっと…こい…恋人が、やってまして」

「あ、実はそれも結構います。にしても本当…」

「…あ、でも、」  
「？」

準備室に戻りかけたカナエさんが立ち止まる。

準備室の奥の壁には、赤黒く塗られ沈んだ風景画が何枚か飾られていた。

この場で口に出すべきかは迷った。でも、ここで自分を偽ることはむしろ、カナエさんに対する侮辱にも近いかもしれないと思った。

「もう、この世には、いないんです。」

カナエさんは一瞬目を見開いて、それから少し目を逸らして、でも、少し遠くを見るような感じで、

「それは、失礼。これまでは一度も、そういう方って、いなかったもので。」

と呟いた。

生前、彼女はある水彩画教室に通っている、と言っていた。

「カナエ」という女性の友人の話も、彼女の話にはよく上がっていた。

\*

そういうことがしばらく続いて、彼は、わたしと、「きちんとした形でお付き合いがしたいです」と言ってきた。でもわたしには、なにもできる気がしなかった。

たしかにわたしにとって、彼は特別なひとと言っていいくらい彼と会ってなにかすることが楽しみになっていったし、ふとして彼のことを考えることも多くなっていた。

けれどもそれは、彼がわたしと出かけてくれるからで、彼がわたしと話をしてくれるからで、わたしが彼に興味

をもっているからで、全部わたしのエゴなんじゃないか。わたしが彼の恋人になったところで、わたしがしあげることがきつとない。

そんなことが、いやおうなしに、一気に頭をよぎって、首筋から全身に鳥肌がはしった。

そうしたら彼はなにを思ったのか一瞬目元に変な力が入ったのがわかった。

とっさにわたしは言葉を発していた。

たしか、気持ちは、うれしいとおもってるから、そんなようなことを言った気がする。

このままだとますますなにもわからない気がして動悸に苦しみながら一心にたたみかけた記憶がある。

それでも、なにもあなたに返してあげられる気がしない、そんなことがたぶん伝わったんだと思う。

彼はいつか見たみたいに目を丸くしたまま固まって、それからおでこに手をあててちよつと笑って、それからこっちに向きなおって、なんだ、見返りなんて、そんなもの求めているつもりはないですよ、そんな感じのことを言った。

わたしが黙っていると、やっぱ、いやですか？ というので、あわてて否定して、それで彼は、すつと力の抜けた優しい顔になって、よかったです、これからもよろしくおねがいしますね、的なことを言ったように記憶している。

\*

カナエさんの教室は決して規模の大きいものではなかったので、学校の授業の過程のように全員に技法を教えるというのではなく、生徒それぞれに応じて課題をみつ

けたり目標を設定したりして描いていく方法を取るらしい。

いずれにせよ、たるんだ感じはないものの、和気あいあいとして、ほどよい緊張感があった。

あまりにも美術に疎すぎた僕は、鉛筆で面を取る練習から始めることになってしまった。

鉛筆を包むように持って、黒色を少しずつ紙に乗せながら、馴染ませて、おぼるげながら、陰が形をつくっていく。

水彩画の教室に、ひとり鉛筆の小気味よい音を鳴らし

ていく。  
「うん、いい感じですね。しっかり観れています。」

「！」  
描いていたところにいきなり話しかけられて思わず体が跳ねる。

「あ、すみません、驚かすつもりはなくて」

「あ…いえ、つい集中していたもので…」

「いいことですよ」  
褒められてふと感想を述べてしまう。

「そうですね…なんか、僕が、自分でも、こんな

に描けると思ってた。いや、描けてるっていったら皆さんにも失礼なんでしょうけど」

「そんなことないですよ。」と、となりで黄色いバラの造花を描くマダムがお世辞を挟む。

「ええ、ちゃんと形がとれます。位置関係と陰影の具合をちゃんと観察してる証拠ですよ。」

「…うーん、正直、そこは違うかな」  
「……え？」  
「あーいや、皆さん、そうおっしゃるんですよ。でもそ

れってどつちかかっていうと、知らなかった、っていうのが大きいんじゃないかなって。」

「思わず、描いていた生徒たちの手も、談笑の声も、止まって、カナエさんを見ている。」

「こういうことって、あんまり教えないじゃないですか。だからみんな勘違いしてる。確かに「才能」ってのがあるのはウチみたいなのはよく知ってますよ。でも、ちよつと教われれば、あなたみたいにまじめな人は、結構すぐ描けるようになるんですよ。実際けっこう筋がいい。でもやっぱり教わらないから、知らないから、自分なんか描けない、才能無いって、勘違いしてる。」

「あ、なんかシーンしてしちゃった！へへ、すみませんすみませくん、ほら、続けてくださーい、ほら高野さーん、娘さんの誕生日、完成させるんですよー」

空気を割るみたいに軽く手をたたきながら、溶け込んでいくカナエ先生。

またさっきまでの雑談も作業も戻り、それぞれ、どりの画用紙に向かってゆく。

「あ、そうだ、」

忘れ物を取りに来たみたいひよこつとカナエさんが僕の机にもどってくる。

「反射光って。描いてます？」

「反射光？」

「あちや、教えてませんでしたっけ。」

カナエさんは指をさしたり手をかざしたりしながら説明してくれる。

「テーブルクロスとの接点の近くの暗く陰になるとこ、よく見るとちよつと明るくなってるのわかりま

す？」

「あ、ほんとだ。」

「言われて初めて気づくくらい微妙だが、確かに明るくなっている。」

「ここ、白いクロスで反射した光が跳ね返って、明るくなってるんです。」

「こうやって、知識で眼を補うのも、たまには大事です。」

「ためになります」

「軽く会釈。」

「ま、そのためのウチですから」

\*

休日、なぜだか急に掃除がしたくなって、部屋の整理をしていたら、しわがついてくたびれた水族館のチケットの半券がでてきた。

わたしの誕生日の日に、彼はわたしがずっと行きたいといっていた水族館につれていってくれた。

ふとニュースで、こどものころに見たイワシの大水槽がリニューアルオープンする、という話を目にした。それで、大人になってからどうしてかめつきり行かなくなつてしまっていた水族館に、久しぶりに足を運んでみようかと話をしたのを、彼がデートプランとして組み込んでくれたのだ。

わたしはこどものころに戻ったみたい落ちつきなく、濃紺色のなめらかな空間にかこまれた入口の列に並びながら、欠けた記憶をよみがえらせようと、今度こそは忘れまいと、あたらしくなったのはどこだろうと、あたりをつぶさに見まわせばかりいた気がする。

メインの水槽に着くまえは、それはもちろんそわそわはするけれど、それでも、南の海のヴィヴィッドカラーの魚たちや、無我にただようクラゲたちへもひっきりなしに目移りがする。

彼を何度も呼びよせるから、疲れさせてしまっていたのなら申し訳ない気もする。でもそうして一緒に見て、彼は目を細めて、自然と笑いかけてくれて、あの白黒の魚はひれが絡まりそうであだとか、これは青があざやかでどうだとか、それはなにか楽しいことがあるたびにぴよんぴよんして、わたしみたいでこうだとか、そんな話を特別な人とできるのには、確かにつまれていたあたたかさがあった。

それから先にすすんで、海のトンネルの後の、なにもない、濃紺の狭くて暗い通路を抜けて少し顔をあげた、瞬間、

ひらけた頭上はるかにひろがる藍あおい暗がり、それに向かいあってそびえる空色のかたまりに、精緻な銀箔のアラベスクが均質に巨影をなしてひるがえり、ひかりの中をすべらかに脈打ちながれていた。

思わずわたしは彼の手をつかんだままなことも忘れて駆け出しそうになり振りだそうとした右手のなかに在る彼のぬくもりと、自分のからだの歳相応に大きいのに気づいてしゅんとして歩みを遅めた。

彼は呆れたように口許をゆるめてちよつと歩み寄ってから、わたしの背中を少し大きなてのひらで二回、やさしくたたいた。

彼とならんで、このイワシの大水槽を目の前にして、わたしはその場に立ち尽くしたまま視界をすいとられて、

楽園でもみている気分になったことを、今でもよく覚えている。

あそこからは見えないこの暗がりには、溶けて意識だけになっていくくらい夢中に、すっと気持ちがいいで、気が付いたら彼の体温がわたしの手をつつんでいた。

その日の夜、食事のあととはふたりで彼がわたしに好きそうっていった映画を見に行つて、その感想戦もしていたら、すっかり夜も更けた。

どこまでもこうしてふたりで話しているこの時間が、途切れることはなく、どちらともなく、終わりをむかえたように思う。

こうしてふれることができれば、このときだけはなにもかもわかったように錯覚できるくらい、空気をつかんだ布団のなかで、わたしを愛してくれたひとの肌は、はなれたらその途端にわたしの全部が冷たくなって止まってしまうんじゃないかってくらいあたたかくて、引力みたいなものにわたしは、すがって、必死にしがみついていた。

その日が本当にわたしの大切な日だったんだと自覚したのはいつ以来だったか知れない。

本当にわたしにはもったいないくらいの一ひだった。

\*

生徒の皆さんが帰ったあとの教室は、絵の具のにおいを残してしんとしていて、使い古され混ざった色のこびりついた水入れが、水道脇に干してあった。教室の後には時間が空いているというカナエさんに甘え

て、そのまま彼女についてお互い話をさせてもらえることになった。そのなかで僕が、実は彼女とは最近関係を解消したことを伝えると、

「それって、要は、自殺の原因があなたにあるって言いたいんですか？ それとも、それについてウチがなにか知っている、と？」

カナエさんはおもむろにそう問うてきた。

「え？」

「だって、分かるわけじゃないですか。究極的には。

関係は、あるのかもしれないし、ないのかもしれない。

それをウチに話して、それでも知りたいと、あなたがそこまでするのはどうということかなって。」

「………その…非難しているわけではないんです、でも、その、そうやって知りたいと思うことって、何か理由が要るんですか？ 僕は、当然のことだと思っんです」

「まあ、ごもつともだとは思いますがよ。」

ただ、責任を感じるのには勝手ですけど、彼女のことがあなたに全て帰されるというのもおかしな話ですし、彼女にも失礼だとは思いますがね。」

少したけ小首を傾げながら、カナエさんは僕を目を正面に見据え、言葉を発していた。

「あと、後悔と責任感は一緒くたにはしない方がいいとは、ウチは思ってるんで。」

カナエさんは至って冷静に、でも少したけ伏し目がちにそう付け足した。

その後ろには準備室のベージュ色の扉が閉まっていた。

原因？ 罪悪感？

僕が、彼女との交際を絶った。その後彼女は、自ら命を絶った。

僕は一体この二つの出来事に、なにを見出そうとしているのだろうか。

\*

近所の紫陽花がぼつりぼつりひらいてきて。だれもが格別を認める白は美しいけど、わたしはどっちともつかない土壌に青紫に虹をつくっているのを見る方が好きだ。また描きたくなっている。

そういえば彼は何度か、わたしの趣味について訊いてきたことがあった。

どうしてそんなことを訊いてくるのだろうと思うけど、メモ帳に絵が描いてあったり、描きかけの絵をへやにそのまんまおいたりしたから、すこし気になったのだろうか。

最初は彼の部屋でなんともなしにすごしていたとき。

わたしはちよつと顔をあげて、どうして？ って返すと彼は少しなんだかよくわからない顔をして、そのままベッドのへりによっかかって下をむいてだまりこんでしまったから、その話は流れてしまった。

いつか、彼と大ゲンカしたときも、原因はわたしの絵にあった。

わたしの部屋にいたとき、わたしがトイレからもどつてくると、彼がわたしのクロッキー帳を開いてながめていた。

彼になんて見せるつもりもない帳面を、なぜか彼がいつのまにかとりだして、わたしはとにかく頭が真っ白になったことを覚えている。

彼からなんとかそれを取りかえして、気がついたら自分で鍵をかけた玄関ドアの前に立ちつくしていた。彼のことはその向こう側にすでに追い出したあとだった。

とにかく見せるつもりもなかったものが、突然彼に見られてしまったことがあまりにもショックで、われながらひどい剣幕で彼を責め立ててしまったように思った。でもこれといってわたしから連絡する気にもなれなくて、いつも通りときどき仕事で会うことしかできなかった。

そうしていたら仕事の帰りに、彼は突然目の前にあらわれて、勝手に帳面を見てしまったことを謝ってきた。それに彼は見たことないくらい目もとをゆがませて、わたしを見て言葉を発していた。

わたしは、自分でもひどいくらい彼を責めて、彼を追い出したということを、きつと、この場で、はじめて自覚したんだと思う。

彼のそんな顔を見るのはあまりにも苦しくて、もうさせる自分の、自分のしたことの大きさにはっとして、もう嫌になって、わたしはなんとか彼が許してくれるように言葉を絞り出した。

彼はそのあとなんとかすこし笑顔をとりもどしてくれて、わたしはひどく安堵した。

それから、何度か、彼があのとときと似たような顔をするとときがあった。

そういうことが増えたような気がして、もしかしたら、わたしが気がついていないだけで、もともとそうだったのかもしれない。

わたしは、彼の目のつくところには絵とか、そういう

ものを置かないようにするようになった。もうあんな顔を見るのは、嫌だった。

\*

カナエさんは確かにちよつと癖のある人ではあったが、果たしてとてもいい人だった。

生前の彼女について、僕みたいな部外者に、それでも思い出話でもして悼みましようと言って、色々なことを話してもらった。

彼女と初めて出会った時のこと、彼女とモデルをし合つて絵を描いたこと、カナエさんから見た彼女の印象、既視感があるようで、知りもしなかった彼女の一面がそこにあった。

そうして彼女のことを話していると、今日会ったばかりの人なのに、彼女の友人で会ったことが相応しいと思えてきたというか、なんだか旧知の友人であったようにも感じる。

僕はどうしてカナエさんに話を訊きに来たんだろう。

はじめは彼女に関して、何か絶対に知らなければならぬような、重要なことを知りに行くような気持ちがあったような気がする。

彼女の話の中に何度か登場したその名前に、彼女への、何か疑いでもあったのだろうか。

もしくはそれは、嫉妬という感情だろうか。

それは、自分が勝手に抱いた感情を、カナエさんという無関係の人に、転嫁しようとしていたんだ。

今日の前にいるのは、彼女の理由にも、僕の理由にも関係のない、彼女の友人として、僕と同じように彼女を

慈しんだひとりの女性だ。

それを僕のおがままで、なにかをなすり付けることだつて、僕の気持ちの整理をつける手段にすることだつて、それは間違いだ。そんなことにやつと気づくことができた気がする。

\*

スーパーに食料を買いに行く。

パンコーナーに立ち寄ったとき、なんともなしに近くのお菓子コーナーにいた親子連れの会話が耳にはいる。

「なんであつてくんないの？」

「歯医者さんがしばらくお菓子はだめつていつてたですよ。」

わたしは朱股しゅこのいちごジャムを一瞬手にとりかけてやめる。

「じゃあもうはいしやさんいかない！」

「もう、なにいつてるのよ。歯医者さん行かなくて痛い思いするのはケンちゃんだからね。」

ちよつとようすを見てみると、チョコレートのお菓子の赤い袋をもつて子どもはむくれている。

「はいしやさんきらい！」

「わかつたわ、嫌いでもいいから言うこときいてちよつだい、ケンちゃんのためつていつてるんだから。」

母親は子どもがさわいでいるのが衆目にさらされているのを感じたのか、声のトーンを極力おとしながら、必死になだめている。

やがて子どもはあきらめて、いやいや袋を棚にもどす。わたしは6枚切りトーストをかごに入れて、やつぱり

きれそうだったいちごジャムを手にとった。

レジに並んだときに、また親子の姿を目にすることができた。

子どものほうはおとなくしているものの、まだ納得してはいないみたいだ。

もしその理由がわかっても、理由がわかっているうちは、まだこどものままなのかもしれない。

\*

別れ際、カナエさんはおもむろに奥から、一枚の額縁を持ってきて言った。

「そういえば、これ、あげますよ、」

「これは……」

抽象画というやつだろうか？

「わけわかんないと思いますけど、一応彼女をモデルに描いたやつです。ほんとは完成したら彼女にあげようと思ってたんですけど、まあ、供養です。どうぞ」

部屋に帰って改めて眺めてみると、そこには明るく生命力にあふれた、無邪気な色彩の乱舞があった。

僕はふと彼女と大喧嘩した時のことを思い出す。

僕がほんの好奇心で、彼女が大切にしていたらしいスケッチブックをふと覗いてしまったことが原因だった。

トイレから戻ってきた彼女は血相を変えて突っ込んできて、それを僕から奪い取ると、そのまま抱え込んでうずくまり、聞いたことの無い上ずった声で叫び始めた。

「やめてよ！　なんでそんなことするの？」で始まっていた気がするが、突然のことで、僕も無我夢中で反

論してしまつて、詳しい内容は覚えていない。

気付けば僕は玄関の外に放り出されていた。

彼女からはしばらく連絡が途絶えた。

もう彼女は僕の方を向いて、いつものような笑顔を見せてくれることは無いんじゃないか。むしろ今まで彼女は僕に心から笑いかけてくれていたことなんてあったのだろうか。そんな思いがその時の僕の頭の中を支配していた。

それでも仕事で話さなきゃいけないときは至って仕事として接してくるのでますますものすごく拍子抜けして、でも僕がさらに冷静になってくると、だんだんと空恐ろしくなってきた。

彼女の仕事が終わるタイミングを計って待ち伏せして正面から謝ると、彼女は一回り小さくなったように俯いて、「突然のことでびっくりして、私もムキになっちゃって、こんなに悲しませるとは思ってたなくて、ごめんなきい」というようなことを言われた。

一時はどうなることかと思つても、決着はあつけないものだ、その時は思つたのだった。

思い返してみれば、その時からだったかもしれない。

僕は彼女に何も言わずに、ひどいことをたくさんしてきたのかもしれない。

それなのに被害者面して、自分のことばかり考えて、つらくなつても仕方ないじゃないか。

どうして今になって、そんなことに気付く。そんな僕が情けなくなつた。

\*

いつものこの時間、でもきょうはちよつといつもより

遅いかもれない、カナエたちと会つた帰り道。

ふたりで並んで、暗闇に橙に点つた街灯と街灯の間を結んで歩く。

ふたりの会話がなんともなしに途切れたので、ふと訊いてみる。

「きょうつてアトリエで寝るの？」

「ん？　んん、そのつもりだけど、どつたん？」

カナエは茶髪のショートボブを、ちよつとほおに、斜めにかしげで尋ね返してくる。

「じゃあ泊まつていい？」

「なんでよ」

ほんの笑つたまつげが、ほんの黄色く光る。

「え？　だつてカナエしかいないんでしょ？」

わたしは歩いたまま少しカナエを向いて訊く。

「うん……。じゃ、コンビニでなんか買つてどうか。」

夜闇に7と1の看板がぼんやりと赤い。

そのまま流れで寝る準備をすすめながらカナエと話してしまふ。

カナエはまた新しい画材をためしてなにかやろうとしていられるらしい。

へやの隅には混ざつた絵具の色たちと謎の道具たちが渾沌をつくっている。

こういうカナエを見ると、ほんとうに水彩画が専門なのか、いつも疑わしくなるくらい楽しい。

そんなことを延々話していると、自然とお互にくたびれてきて、どちらともなく歯みがきとかをはじめる。

ミルク色の歯みがきコップを置いて、ベッドにもどつてきたわたしも頭がふにやふになつて感じがする。

「ちよい、家主より先に布団に入んな」  
カナエがトイレに行った隙に布団に入ってたわたしを  
とがめてくる。

「ほら、カナエも入りたまえよ」

「といって布団を上げると、

「だから家主ヅラすんなや」

「いいながらカナエも布団に入ってくる。

カナエはいつものおつきいめがねをいつも置いてある  
傍らに置いて、のぼしきった電灯のひもに手をのぼしな  
がら、

「んじや電気消すよ？」

「逆光と深い色の目という。

「うん。」

視界が黒くなる。

カナエが布団を深くかぶせて、影を一層濃くする。

するとアトリエの絵の具とか、ときどき使っているよ  
くわかんない道具とか、木材とか、カナエの植物性のシ  
ヤンプーとかのにおいがわかるようになる。

目が慣れてくる。

カナエが目を開けている。

「ねえ、カナエ？」

「ん？ なーに？」

カナエは目を閉じたまま反応する。

「わたしのこと、好き？」

カナエがうすく目を開く。

「んん？ なにさあそれ」

「わかんない」

わたしは陰影で黒ずんだ敷布団に視線を外しながら返  
す。

「ええ……、なんでわかんないこと訊くん？」

「わかんないから訊いてんの」  
「うーん？」

カナエの動きに布団がすこし下がって、玉子色にほお  
に微光がさす。

そのままカナエは片手でわたしの両側のほおを挟ん  
で、

「好き。よくわかんないけど。」

カナエはお母さんみたいに笑っていた。

わたしは目を閉じる。まぶたの裏に赤くパチパチと聞  
ができる。

「おい、無視すんなや。」

\*

彼女は確かに、時々僕に冷たかった。

でもそんなものは、僕が勝手に思っているだけじゃな  
いか。

彼女は僕には分からないことをたくさん持っていた。

でも、それでも、いや、それだけ彼女は僕を惹きつけ  
る人で、僕は彼女が好きだった。

だから猶更彼女のことを知りたくなった。

その中で僕は彼女のことを分かった気になって、いつ  
からか、僕は彼女に寄り添うことを、やめてしまったの  
かもしれない。

カナエさんが見てきた彼女の姿は、確かに僕が付き合  
っていた彼女の姿で、一方で僕が面と向かって接してき  
た彼女とは違う姿をもっていた。

カナエさんと彼女は僕の知らないことを話して、カナ  
エさんは僕の知らないことを彼女に教えて、彼女も僕の  
知らない姿をカナエさんに見せていた。

僕の知らない彼女は僕の中の彼女をまた好きになるき  
っかけを与えてくれた。  
でももう遅かった。

むしろ彼女は僕に何をしてきたというんだろう。僕は  
結局、自分の都合で一方的に彼女を拒絶したにすぎない  
んだ。

裏切ったのは僕だった。

彼女は僕にとってたつたひとりの女性だった。

もう取り返しはつかない。

ほつりと、手元の絵にシミができた。

あわてて顔を拭って絵を拭こうとしてみるが、ちよう

ど赤い絵の具は小さく滲んで戻らなくなった。

折角もらった絵なのに、彼女にもカナエさんにも…

「後悔と責任感は一緒くたにはしない方がいいとは、ウ  
チは思ってるんで。」

そうだ、僕は、彼女が自ら命を絶ったことを、僕の所  
為じゃないって、言ってるしかなかったんだ。

探偵気取りで理由を探るふりをして、原因を押し付け  
られる先を探して、でもどこかで、僕が悪いんじゃない  
かってことは、思っていた。きっと、そうだった。

でも、それが何になる？

彼女は、もういない。

何かが、いや、なにかもが分かったところで、彼女  
にはもう会うことすらできない。

もういないのだから、分かることすらないかもしれな  
い。



もう僕にできることは、ただ、生きることだ。  
何にもならない後悔と一緒に、生きていくことだ。

僕は絵がこれ以上傷つかないように、目もとを拭って、  
絵を額縁にしまってから、飾り棚の仲間の中に何気なく  
立てかけた。

\*

カーテンをレースまで全開にしてから、窓を開いて、  
レースのカーテンを少しひく。

この朝は、あめあがりの湿って暗くなった地面とは反  
対に、ひとしきり空が熱をうばった後の、どこまでも高  
く青い、冬の早朝のような朝だ。

いつかカナエが描いてくれた、精緻な幾重の幾何学  
の、乱れた銀河系のように、指でふれれば壊れそうな朝  
だ。

きつとこれはこれからも、とどこおりのなくつついて  
いく朝だ。

\*

終演